

えきまえじょうかく
JR鹿児島本線・基山駅



基山駅から北側の土塁跡を見る。白線の間が土塁のあったところ。土塁は、基底部幅で約40mほどあったとみられる。前ページは、それを上空から見たところ。舌状に丘陵が張り出し、狭くなった場所に土塁を構築していた様子がわかる。



土塁の取り付いていた西側の丘陵部末端。かつて土塁断面が見えていたが、現在はコンクリートの擁壁により、見る事が不可能。この丘の北麓にある個人宅の庭先の築山は、土塁の名残か。

水城を上空から見る（参考）
中央を走るのが鹿児島本線

基山の小水城（佐賀県）

出典：前頁および水城写真
『目で見る太宰府の文化財 1 水城』1994 より

筑紫野市宮地岳で発見された古代山城は、所謂「神籠石系山城（文献史料に記載のない）」である。そのため、筑紫君磐井と結び付けようとする動きがある。こうした性急な「郷土史家」的発想には、慎重な対応が必要である。筑紫野市教育委員会の調査をまちたい。
(城郭研究室ニュースNo.5補遺)



「城踏」の様子

博多駅からJR鹿児島本線の快速に乗ること約30分で、基山駅だ。「きやま」と読むこの駅は、7世紀に亡命百済人によって築かれた基肄城（きいじょう）のある基山の麓に位置する。

白村江の敗戦（663年）で唐・新羅連合軍の襲来が現実味を帯びてくると、天智天皇政権は、大宰府防衛のために基肄城と大野城を築かせた。大宰府はこれら山城のほかに平野部では大きな土塁（堤）＝水城（みずき）によって守られていた。

大宰府西北の福岡平野に向かって、水堀と土塁からなる水城が狭隘部を塞いでいたことは現存する遺構のありかたからよくわかる。同様に水城の南・西部などでは谷筋を塞ぐように、数ヶ所で土塁を築いているのである。それらの土塁は、水城ほど大規模ではないので小水城と呼んだりする。これらの施設は主に、交通路を押さえて敵の進攻を防ぐのを目的に築かれている。

朝鮮半島でも、慶州（キョンジュ）を倭軍から守るために築かれた関門城（クアンムンソン）が、類似例としてはよく知られている。こうした城のことを、その機能から遮断城ということもある。